

## 第3章 富士宮市の歴史文化の特性

富士宮市の歴史文化は、富士山の南西麓の広い裾野で富士山や天子山地・富士川などの自然と人々が共存して形成されたものです。

本市にとって富士山の存在はかけがえのないものであり、富士山の火山活動によって育まれた土壌や湧水などと共に生きてきました。また、富士山への畏敬の念による信仰や、自然の恵みを活かした産業、災害対応、生活向上を目指す取組を通して歴史文化が生まれました。

また、富士山や周辺の山々との地理的環境に制約された道や川は、山梨県方面と東海道をつなぐ経路として利用され、本市は人と物の行き来の要所として、様々な歴史が繰り広げられました。

本市に暮らした人々は、日々富士山との関わり、想いをもちながら生活してきました。そして、富士山を目指す人々との交流の中で、本市独自の歴史文化を育んできました。

このようなことから、本市の歴史文化の特性を次の5つのように捉えます。

表 3-1 富士宮市の歴史文化の特性

1 富士山と生きる歴史文化		
(1)	富士山に祈る	<ul style="list-style-type: none"> <li>■噴火への畏怖と遥拝</li> <li>■興法寺と修験者たちの活動</li> <li>■江戸時代の庶民の富士登拝</li> <li>■明治時代以降の富士登山と信仰</li> <li>■富士山の神仏</li> <li>■富士山に関わる寺社の祭礼</li> </ul>
(2)	富士山の自然と生きる	<ul style="list-style-type: none"> <li>■富士山の恵みと生活</li> <li>■富士山の災害と生活</li> </ul>
(3)	富士山の麓を拓く	<ul style="list-style-type: none"> <li>■用水路の開削と新田開発</li> <li>■朝霧高原の開拓</li> <li>■土壌を活かした農業・産業</li> </ul>
2 道と交流がはぐくむ歴史文化		
(1)	陸の道と交流がはぐくむもの	<ul style="list-style-type: none"> <li>■交通の要衝</li> <li>■街道沿いに伝わる古文書・石造物</li> <li>■明治時代以降の交通の発展</li> <li>■山梨県と静岡県の文化の融合</li> </ul>
(2)	川の道と交流がはぐくむもの	<ul style="list-style-type: none"> <li>■富士川舟運（タテ渡し）と富士川渡船（ヨコ渡し）</li> <li>■水難者供養の行事</li> </ul>

## 1 富士山と生きる歴史文化

富士山はその厳しい自然ゆえに、人々から畏敬の念をもって信仰の対象とされてきました。そして、その周辺地域では自然環境と調和した独特の暮らしが育まれています。富士山は保水力の乏しい土壌を形成し、地下に浸透した雨水は溶岩の末端で湧水として現れます。そのため、富士山の豊かな水資源は、湧水を水源として用水を開削し、耕地を開墾した先人たちの労苦によって市内各地に行き渡るようになりました。今日ある山麓の生活と産業は、このような自然環境と向き合い、共存してきた人々の努力の賜物だといえます。

### （1）富士山に祈る

富士山は古くから畏敬の念をもって信仰され、噴火が盛んな時期は遥拝、収まると修験・登拝などのように、様々な形で信仰されてきました。さらに富士宮市においては、富士山への信仰は富士山を祀る寺社への参拝や祭礼、富士山に関わる伝承などの形で、文化や生活の中に深く息づいています。

#### ■噴火への畏怖と遥拝

平安時代中期までの富士山は、噴火を繰り返す山であり、人々は麓から噴火の鎮静を祈りました。浅間大社（国指定史跡）は噴火の鎮静を祈るため造営された神社であり、山宮浅間神社（国指定史跡）は、山麓から山頂を仰ぎ見て遥拝する場だとされます。



写真 3-1 遥拝所（山宮）

#### ■興法寺と修験者たちの活動

噴火活動が沈静化すると、富士山は修験道（日本古来の山岳信仰と密教・道教（神仙思想）が習合したもの）の考え方において、山頂に仏の世界があると考えられるようになりました。その中で多くの修験者が山頂を目指し、山中で修行しました。

末代は平安時代後期、富士山へ登拝し、山頂に大日寺を構えて一切経を埋納したとされます。末代以降も山頂において懸仏や仏像の奉納、經典の埋納が行われました。これらの一部は市の指定文化財となっています。また末代は村山に寺を建立して修験道の拠点としたとされ、この寺が富士山興法寺（現村山浅間神社）へ発展したと考えられています。



写真 3-2 村山浅間神社（村山）

現在村山浅間神社には、修験に関わる仏像や古文書などが、神社周辺は江戸時代以前の修験集落の痕跡が残されています。また江戸時代の日記や江戸時代以降の地域の神社に残され

た棟札や祈禱札などから、修験者たちが地域住民のためにおこなった祈禱や祓いなどの活動を知ることができます。

### ■庶民の富士登山

室町時代後期になると、浅間大社を起点とし、興法寺を經由して山頂に至る大宮・村山口登拝道が整備され、庶民も富士山に登るようになりました。浅間大社や興法寺には、富士川以西の地域から多くの道者（登拝者）が訪れ、周辺には道者のための宿坊が整備されました。富士登山を描いた曼荼羅図、浅間大社の旧社家や村山浅間神社に伝来する古文書などから、庶民の富士登山の様子を知ることができます。



写真 3-3 人穴富士講遺跡の碑塔群（人穴）

江戸時代中期以降、関東を中心に富士講が流行すると、北口（富士吉田市）は関東からの道者が多く訪れるようになりました。北口から富士登山をした道者は、その後、駿河国へ向かい、富士講の開祖とされた長谷川角行の修行した人穴（国指定史跡）や白糸の滝（国指定名勝及び天然記念物）などを訪れました。人穴へ向かう道標や、人穴を訪れる富士講の世話などを行っていた家の資料、富士講の道者が市内へ奉納した碑塔などから、関東と中心とした富士講の活動を知ることができます。

### ■明治時代以降の富士登山と信仰

明治時代に入ると新政府の神仏分離政策により各地で廃仏毀釈運動が起こり、富士山中でも仏教的な地名が神道的な地名に変更されたり、祀られている仏像が破壊されたり、麓へ下ろされたりしました。麓へ下ろされた仏像を「富士山下山仏」と言い、市内でもいくつか確認できます。

また明治 39 年（1906）に村山を經由しない新道が開削されたことで、大宮から現在の六合目までの旧来の登山道が登拝道としての機能を失い、信仰登山の意味は次第に薄れていきました。さらに昭和 45 年（1970）に開通した富士宮口五合目までの自動車ルートにより、交通手段の利便性が向上し、多くの人が観光やレジャーなどの目的で富士登山をするようになっていきます。

しかし 7 月 10 日のお山開きの際に村山浅間神社において、地域の人々が護摩焚き神事や水垢離を行ったりするなど、地域の中に富士山への信仰は受け継がれています。



写真 3-4 富士山下山仏（宝町）



写真 3-5 衣掛松記念碑（西町）

## ■富士山の神仏

噴火を繰り返す富士山の姿に人々は神仏の姿を見出していました。

鎌倉時代、人穴は富士山の神仏である「浅間大菩薩」の御座所と呼ばれ、室町時代に描かれた曼荼羅には、富士山の神仏として山頂に薬師如来・阿弥陀如来・大日如来が描かれています。江戸時代になると、富士山の神仏の姿の1つとして、コノハナサクヤヒメが江戸を中心に急速に広まりました。本市には、コノハナサクヤヒメをはじめ、富士山の神仏に関わる伝承・地名などが数多くあります。

## ■富士山に関わる寺社の祭礼

市内には、富士山の神を祀る神社が数多くあります。

代表的なものとして浅間大社があり、年間を通じて富士山の水の恵みに感謝し五穀豊穰を祈る祭礼が行われています。4月に行われる「初申祭」は、江戸時代以前は毎年4月・11月の例祭前に、祭神が山宮浅間神社（山宮）と浅間大社（里宮）を往復する「山宮御神幸」という行事であり、市内には、神幸中に運ぶ銚子を休める「銚立石」や神幸道を示す「丁目石」、神幸に関わる古文書が残っています。



写真 3-6 御神幸道首標（宮町）

## （2）富士山の自然と生きる

富士山は、富士宮市の暮らしと密接な関わりがあります。本市に生きる人々は、富士山の水の恵みによって生活を支え、産業を育んできました。一方で富士山は、融雪期や大雨時に土石流などの災害をもたらしました。しかし本市に生きる人々は工夫を重ね、災害に向き合ってきました。

## ■富士山の恵みと生きる

富士山に降り地下に浸み込んだ雨や水は、麓の溶岩の末端で湧水として現れます。湧水池周辺は、縄文・弥生時代から人の定住が確認されています。猪之頭湧水池を水源とする芝川沿いには田畑が広がり、川中では江戸時代に富士苔（ふじのり、芝川海苔）が採取され、流域の村の年貢として領主へ納められたり、各所へ献上されたりしました。

豊富で綺麗な水は産業にも利用されました。江戸時代には富士山麓に自生する三桮を材料とする「駿河半紙」の生産や日本酒の醸造が、大正時代にはワサビ栽培が、そして昭和時代には養鱒が始まりました。

豊富な水は動力としても使われました。江戸時代から川や用水路に水車が置かれ、精米や製粉・製材などの動力として使われました。明治維新以降、我が国が急速に近代化をおし進める中、水力を利用しての工業振興が図られ、本市では潤井川・芝川沿いに水車動力による製紙工場が開かれました。明治時代後期には、市内有力者によって本市最初的水力発電所で

ある泉発電所が建てられ、現在の中心市街地に電力が供給されました。さらにこの時期以降、製紙工場の動力源として、芝川や潤井川沿いに水力発電所が次々と建てられました。こうした経緯から、本市には、明治時代以降に建てられた数多くの水力発電所があります。

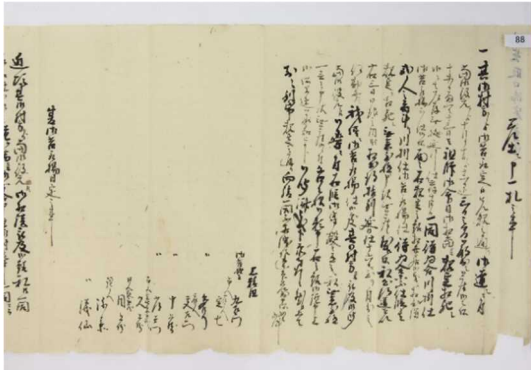


写真 3-7 富士苔の採取について書かれた古文書（市蔵）



写真 3-8 江戸時代から続く酒造り



写真 3-9 狩宿発電所 第二堰堤（上井出）



写真 3-10 三桮栽培記念碑（上井出）

## ■富士山の災害と生きる

富士山は恵みだけでなく災害ももたらしました。噴火による災害と土砂災害です。

富士山の噴火と遺跡の消長の関係は明らかではありませんが、地層の状況から縄文時代中期の噴火後、縄文時代後期から晩期は少なく、人々が噴火の影響で生活していくことが難しくなったことが考えられます。しかし、文字による記録がみられる時代になっても、本市への直接的な噴火の被害は明らかではありません。

江戸時代の宝永4年（1707）、富士山の南東斜面で噴火が発生しました。この時、富士山南西麓に位置する市域では、火山灰が降り積もる被害はありませんでした。

一方で、融雪期や大雨時に沢を流下する土石流は、今日まで多大な被害をもたらしてきました。特に富士山西斜面に位置する大沢崩れは膨大な土砂が流出し、下流地域で度々土砂災害を引き起こしてきました。こうした被害から生活を守るため、江戸時代には近隣村々が無間沢（潤井川）に砂除堤（堤防）を設置し、昭和以降は静岡県・国土交通省が大沢崩れで砂防工事を行っています。

沢が発達していない万野原では、大雨時に雨水が流れる沢がなく、山麓の斜面をそのまま流れました。雨水は万野原やその南に広がる市街地に被害をもたらしました。そのため江戸

時代から明治時代までに、雨水を川へ排水する一番堀・二番堀・三番堀が、昭和44年（1969）に4番目の堀（現弓沢川4号幹線）が造られました。



写真 3-11 宝永地震・宝永噴火との関連が想定される二股村石経塚（粟倉）

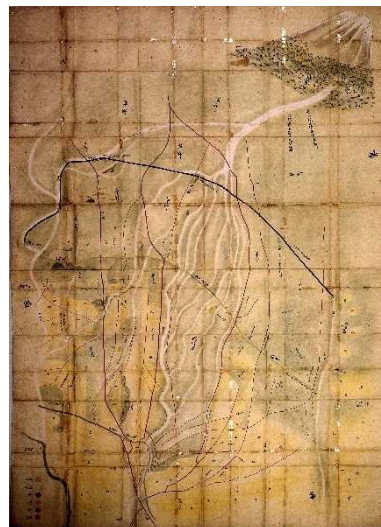


写真 3-12 大沢崩れから幾筋もの沢が広がる様子が描かれた絵図（上井出）

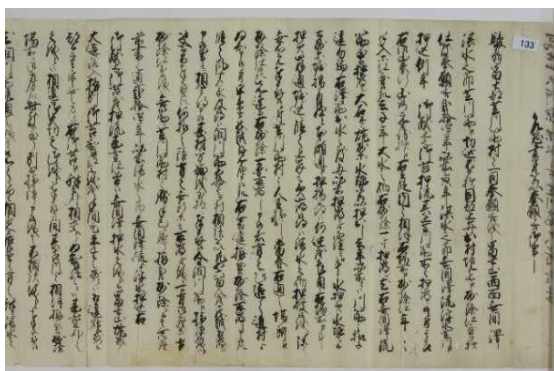


写真 3-13 砂除堤の設置について書かれた江戸時代の古文書（市蔵）



写真 3-14 二番堀（山宮）

### （3）富士山の麓を拓く

富士山は、富士宮市に生きる人々に、保水力が低く農業に向かない土壌と限られた水源という厳しい生活条件を与えてきました。人々は、その厳しい自然環境と向き合い、用水を開削して水不足の克服を目指す一方、その自然環境を活かしながら、生活や産業を営んできました。

#### ■用水路の開削と新田開発

本市は水に恵まれている地域と恵まれていない地域があり、後者では田畑だけでなく生活用水の確保にも苦慮しました。しかし戦国時代以降、河川や湧水を水源とする用水路が開削・順次拡張されたことにより、徐々に畑作地が水田地へと変わっていきました。しかし用水路の維持管理は簡単ではなく、市内に残された古文書などから、関係する村の間の調整に苦慮していたことがうかがえます。

また水源から遠い万野原では、江戸時代初期から用水路の開削や新田開発が試みられてき

ましたが、中々成功しませんでした。そのため水不足に備える井戸や水の恵みを願う神社、用水開削や新田開発に関わった家に伝わる古文書などがあります。



写真 3-15 井戸（万野原新田）

### ■朝霧高原の開拓

江戸時代、市北部地域の茅場は、周辺の村々の入会地とされ、屋根の材料や家畜の餌の採草地として利用されてきました。一部では、第二次世界大戦後に食料増産などを目的として、長野県伊那から西富士長野開拓団が入植し、開拓が始まりました。昭和29年（1954）、朝霧高原は国から「高度集約酪農地域」の指定を受け、富士山麓の広大な土地と土壌、寒冷な気候を活かした本格的な酪農経営が行われるようになりました。



写真 3-16 朝霧高原の人工草地（根原）

現在、県境の茅場が朝霧高原の人工草地（外来牧草による草地）へ変遷する景観から、山麓の土地利用の変遷を見ることができます。

### ■土壌を活かした農業・産業

富士山麓の火山灰土は黒ボク土と呼ばれ、水はけがよく水田などに適さなかったため江戸時代以降は煙草や茶、明治時代以降は桑などの栽培がされていました。養蚕業が発達し、さらに並行して製糸業も発達すると、本市は製糸業の町となりました。現在も市内には、煙草の乾燥小屋や製茶・養蚕・製糸に関わる道具などがあります。

現在本市では水はけのよさを活かした露地栽培が盛んになっています。本市でよく食べられる「落花生なます」「ゆで落花生」は、土壌を活かして栽培された落花生を用いた本市の食文化の代表といえます。



写真 3-17 ゆで落花生

## 2 道と交流がはぐくむ歴史文化

富士宮市は縄文時代から連綿と続く人と物の交流の歴史をもちます。縄文時代の遺跡からは、伊豆諸島の神津島・長野県の霧ヶ峰・伊豆半島の天城山などで産出する黒曜石で石器を製作していました。縄文土器は関東・中部山岳・東海地方の影響を受けた文様のものが出土しています。弥生時代になると東海西部地域をはじめとした、近畿地域、北陸地域などの土器が多く出土し、東海西部地域の文化の影響を受けた周溝墓が作られます。こうした交流がどのようなみちを介して行われたのかは明らかではありませんが、残されたものは交流の歴史を示しています。

鎌倉時代以降、市域には周辺地域をつなぐ幾筋もの水陸の道が確認できます。道沿いには往来のために造られたものや歴史的な出来事の痕跡が残り、また周辺地域と人と物の交流が盛んになったことにより、様々な歴史文化がはぐくまれました。

### （1）陸の道と交流がはぐくむもの

富士宮市には、甲州街道（中道往還）、駿州往還、身延道、郡内道（人穴道）など、本市と山梨県を結ぶ陸の道があり、人・物・情報が行き交いました。特に現在の中心市街地にあたる浅間大社周辺は、人と物の集積地の役割を果たしました。これは明治時代以降、馬車鉄道や鉄道といった近代交通が発達するとより顕著になります。

#### ■交通の要衝

鎌倉時代、本市は甲斐国と駿河国を結ぶ交通の要衝であったことから、鎌倉幕府が主催する富士の巻狩りの開催地として選ばれました。本市の伝承の中でも最も多く確認できるのが、巻狩りと巻狩りのさなかに発生した曾我兄弟の仇討ち事件に関わるものです。

また鎌倉時代後期、本市を拠点とした日蓮の高弟、日興の布教活動と本市に住む信者の交流により、日蓮の教えが広く本市に浸透しました。現在市内には富士五山をはじめ、日蓮の教えを受け継ぐ寺院が数多く存在します。

戦国時代に本市は、戦国大名領国の境目にあることから甲州街道の要衝として戦乱の舞台になりました。戦国大名が



図 3-1 本市に関わる陸の道  
(出典：国土地理院 陰影起伏図をもとに作成)

寺社へ発給した古文書や奉納した美術工芸品、古文書や大宮城跡（元城町）・白鳥山城跡（内房）の遺跡、伝承（伝承地）などがあります。



写真 3-18 陣馬の滝（猪之頭）

### ■街道沿いに残る古文書・石造物

江戸時代になると街道は人や物の輸送路として重要度を増しました。宿場に関わる古文書や人・物の輸送に関わる古文書、行き交う人のために整備された道標・石仏などの石造物、甲斐国や信濃国の石工によって作られた道祖神などがあります。石造物は、特に往還に使われた駄馬や農耕馬などを供養する馬頭観音が多く、駄賃稼ぎや馬力による運搬業が盛んであったことがうかがえます。

### ■明治時代以降の交通の発展

明治時代以降、本市で製紙業が発展すると、資材の輸送のため馬車鉄道が整備されました。これらは身延線の開通により廃線となりましたが、現在も駅の場所を伝える石造物や線路敷の一部が残され、馬車鉄道に関わる昔話や写真などから当時の様子を知ることが出来ます。

戦後、浅間大社の参拝客や富士登山者、身延山の参拝客のおみやげとして、また身延線を使って行商をする商人に身延方面で販売してもらうため、

日持ちする麺が開発されたという説があります。この麺を使った焼きそばは、本市の重要な食文化となっています。



写真 3-19 「大宮町鉄道馬車会社発着所」の碑（弓沢町）

### ■山梨県の民俗に類似した行事

小正月に正月飾りを焼く「どんど焼き」の際に作られるヤナギ飾りや内野で行われる火伏念仏（市指定民俗文化財）は、山梨県にも同じような行事が広く分布しています。これらは山梨県との交流の中で育まれた文化です。



写真 3-20 ヤナギ飾り（根原）

## (2) 川の道と交流がはぐくむもの

富士宮市には、富士川舟運（タテ渡し）と富士川渡船（ヨコ渡し）という山梨県・静岡市と本市を結ぶ川の道がありました。富士川舟運は江戸時代から大正時代まで、山梨県と静岡県を結ぶ物流・交流の大動脈でした。また昭和34年（1959）に蓬莱橋が架かるまで、富士川を渡る手段として渡船が利用され、渡船場で人と物の交流が盛んでした。

### ■富士川舟運（タテ渡し）と富士川渡船（ヨコ渡し）

慶長12年（1607）に開かれた「富士川舟運」は、江戸時代から大正時代まで、甲斐国（山梨県）と駿河国（静岡県）を結ぶ物流・交通の大動脈として機能しました。江戸時代には、甲斐国から年貢米を中心に雑穀・薪炭・寒天などが運ばれ、駿河国から塩を中心に砂糖・肥料・日用品・材木などが運ばれました。沼久保には、船着き場である河岸があり、ここには荷物を取り扱う問屋や船宿ができ、中心市街地まで荷物を運ぶ人などもいて、多くの人で賑わいました。

また蓬莱橋が架かるまで富士川を渡るための橋は、釜口峡の橋場（長貫）・瀬戸島（内房）の間にかけられた吊り橋のみでした。そのためそれ以外の場所では渡船が発達しました。本市には7か所の渡船場があり、沼久保の渡船場は、物の輸送以外に身延線を利用して富士川の対岸へ通勤・通学する人々が利用しました。

富士川舟運は身延線開通をきっかけに、渡船は蓬莱橋の架橋を機に衰退し廃止されましたが、舟運・渡船に関わる古文書や伝承、当時の姿を伝える写真などが残されています。

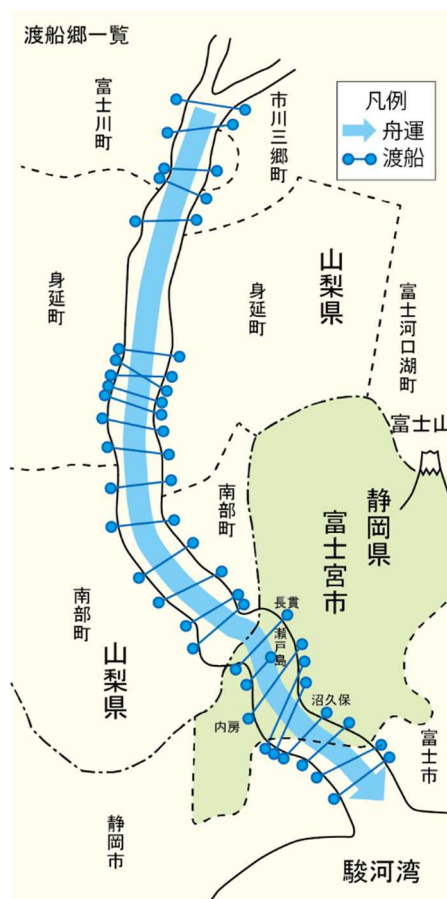


図 3-2 本市に関わる川の道  
（「渡船郷一覧」（遠藤秀男（1981）『富士川—その風土と文化』、静岡新聞社）をトレースし作成）

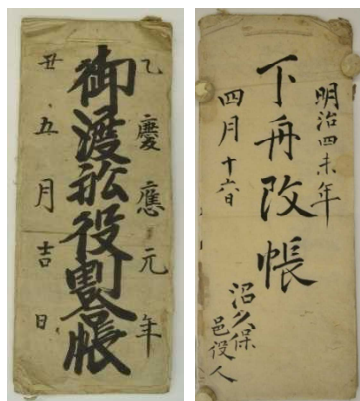


写真 3-21 舟運・渡船に関わる古文書（沼久保）

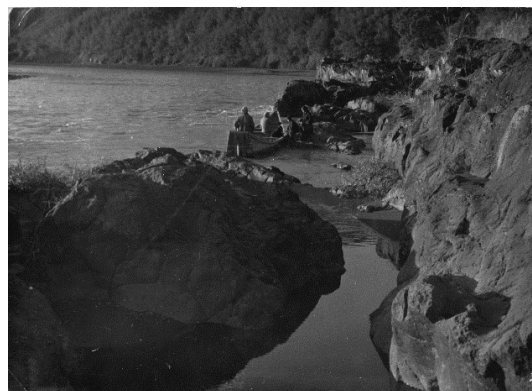


写真 3-22 沼久保渡船場写真（市蔵）

### ■水難者を悼む

富士川は日本三大急流といわれ、水難事故が多い河川でした。富士川沿いでは水難事故により亡くなった人々の霊を慰める川勧請（川供養、カワカンジー）などの民俗文化財や、水難供養碑などが現在まで受け継がれています。



写真 3-23 川供養（内房尾崎）